

◎今週の御言葉 「エルサレム遷都」(サムエル記第二5章1～7節、6章1～21節) 「ダビデは、主の前で、力の限り踊った。ダビデは亜麻布のエポデをまとっていた」(6:14)
仲森文穂

○ユダ王国とイスラエル王国の統一王となったダビデ王は、まず、エブス人が長年住んでいたエルサレムを、地下水路を利用して攻め落とし、これを首都に定め、王宮を建てて統治しました。それを聞いて攻め上ってきたペリシテ人を、彼は神様の導きにより連戦連勝、領土から撃退しました。しかしダビデ王にはまだ心配事がありました。エルサレムにつきまとう異教の町というイメージ、これを一新しなければ遷都は失敗だと揶揄されるかも知れません。彼は、アミナダブの家に安置されている神の箱をエルサレムに運んでこよう、と名案を思いつきました。神の箱には、主の律法を記した二枚の石の板が納められ、神様の霊が充満していました。これを信仰のシンボルとしてエルサレムに安置すれば、イメージは一新される筈です。ダビデ王は3万人の精鋭を送り、この一世一代の盛大なパレードを実行したのです。

○でも人間、有頂天になっている時が危ない。このパレードを思いつく中でダビデ王が祈ったという記事がないのが、心配です。

さて、パレードは失敗に終わりました。神の箱は人が手で触れてはならないとされ(民数記4:15)、運ぶときには通した棒を人が担いで運ぶよう設計されていました。しかし、このパレードでは神の箱を新しい荷車に乗せ、牛に引かせていました。その牛が途中でよろめき、御者のウザがうっかり神の箱を手で押さえたのです。ウザの死を見て、ダビデ王は即座にパレードを中止しました。ダビデ王はウザの死は自分への警告だと悟ったのです。この計画は明らかに、神様を利用しようと自分が考えたものでした。ダビデ王は、神の箱をガト人オベド・エドムの家に預けて様子を見ました。

○3か月後、その家が大いに栄えたというニュースが飛び込んできました。ダビデ王は悔い改め、パレードをやり直しました。運び方も本来のものに変えました。行列が進み始め、何の災いも起らなかったのを見て、ダビデ王は神様に感謝の献げ物をしたと言います。

ダビデ王は、主のみ前で力の限り乱舞しました。サウル王の娘ミカルからは罵られますが、ダビデ王は本心から感謝し、喜んだのです。こうして神の箱はエルサレムに安置され、神の都エルサレムの基礎が据えられたのです。でも、その陰で犠牲ともいうべきウザの死がありました。愛の神も怒りの神も同じ神様の姿です。怒りの神様の一面がなかったら、イエス様の十字架の死もなかったでしょう。神様は人の罪に対する激しい怒りを独り子イエス様にくだし、その犠牲によって怒りをおさめてくださった。そのことを心に刻みたく思います。